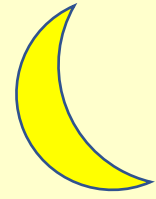


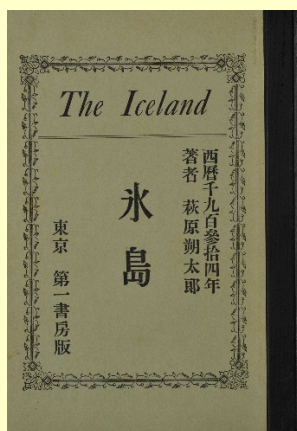
『氷島』



『氷島』（第一書房）は1934年に刊行された朔太郎の第六詩集です。

これまでの詩集と大きく異なっているのは、詩の表現が口語ではなく、文語体（文語で書かれた文章）によってなされている点です。口語詩の先駆者であった朔太郎だけに、文語で構成された『氷島』は詩人たちの中でも評価がわかれました。

朔太郎自身は詩集の序文で「おそらく芸術品であるよりも、著者の実生活の記録であり、切実に書かれた心の日記であるのだろう」と述べています。結婚生活が破綻し、郷里の父を亡くすなど朔太郎の人生になかでも「痛ましい」時期のことでした。『氷島』におさめられた詩はそのような朔太郎自身の「実生活」の感情が色濃く反映されています。



『氷島』（1934年 第一書房）